

接なかわり合いを持ちながら微妙なバランスを保って生きていますが、人間は、この調和した自然を完備なきまでに破壊しつゝあります。最近のすさまじいばかりの開発は、かつて二千年かゝって人間が破壊した以上の自然破壊をわずか十年足らずで行なう危険性をもっているのです。

北筑波稜線林道の建設もこのような無秩序な自然破壊の一例にすぎません。目の前の利益を追ってやまない人間の利己的行動が将来どのような形ではねかえってくるのか、わたしたちはいまこそ真剣に考えることを迫られているのです。

土浦の自然を守る会

多摩川の自然を守る

案内

三省堂新書 三〇〇円

主婦たちが住民運動にどうかかわりあい、どう発展させたかの記録である。桜川三号に文を寄せて下さった森田英代さんの手記も載っている。たった一本の川を自然破壊から守るための人々の努力に頭が下ると共にこのよきな努力がむなしなものにならないように祈るような気持ちで読んだ。

(奥井登美子)

水郷土浦は何処へ行った？

柳生四郎

佐佐木信綱、川田順ら「心の花」の歌人連一行八名、「心の花」の愛読者で、「土浦の素封家で数百年醬油醸造を家業とせられて居る」菊池君をたよって土浦に来たのは大正四年陰曆八月の十六日であった。この時の紀行文を抄出する。

「十一時頃土浦に着車した。駅前茶店に休憩する。菊池某といふ此地の篤志家が見えて一同に挨拶する。小さい女の児を連れてゐる。某の長女で年は五つ名は百合子。」

「町へ出た。それが片側町である。岸に柳の並び立って居る堀とも川とも分らぬ水を隔てて、対岸にも同じ通りがあり、同じ片側町がある。」

「私達は土浦の町を流れる川の落口に出た。即ち霞浦の一端である。目の前は芦の洲で岸と平行に水の川巾に長々と限つてゐる。岸には柳がよく繁つて枝を重く垂れてゐる。其根元とすれすれの水の面には浮草が指の爪程のた円形の葉を隙間をさまで浮べてゐる、」